

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 会誌



あんこま

第13号

平成 26 年 9 月発行

「あんこま」はオオサンショウウオの当地の呼び名です

巻 頭 言

話題など

岡山市におけるナゴヤダルマガエルの保全活動 その1 _____ 1
会 員 貸谷 康宏

イラストスケッチ

サン吉よんこま (その25) _____ 3
会 員 田口 愛子

随想

私にとってのハンザキ研 _____ 4
会 員 安原 珠水

イベント報告

25 年度前半のイベント _____ 5
事務局長 奥藤 修

編集後記 (編集長 黒田 哲郎)

巻 頭 言

急ピッチでの“あんこう”の発行で、巻頭におけるご挨拶に迫られます。今回は、ダルマガエルの救出と保全活動の紹介がありました。一見しただけでは普通の？トノサマガエルと区別がつかないかもしれません。脚長の“殿さま”に比べると短足で“家来”などと下に見られることがあります。あまり跳ねとんで逃げることもできずコンクリートの溝などに落ち込むと“殿”はジャンプできる高さでも“家来”はそのまま乾燥標本になってしまいます。こんなところからも絶滅の恐れが強まったのでしょう。彼らは昔ながらの素掘りの水路だったと嘆いていることと思います。文化財保護法で厚く保護されているハンザキより希少なものは事実なのですが、ハンザキの場合には学術上の貴重さからの特別天然記念物指定なのです。多数のハンザキを工事中に一時隔離する場合に「こんなにたくさんいるのなら保護しなくてもいいのではないか」と言われる方が時々います。しかし、コウノトリやトキのように少なくなってからでは動物の保護はできません。沢山いる内から考えていくことが大切なのでしょう。

安原さんも初登場なのですが、文章にあるように大変に何にでも関心を示し興味津津の姿が印象的です。関心を持つということは大切だと思います。日本の高度成長時代には、“良い子は川で遊ばない”なんて立札があちこちに見られました。関心を持たなくなった多くの人々が河川から目を離している間に、河川環境はひどいものになってしまい、さすがの建設省（現在の国交省）も平成 9 年には河川法を変えて治水と利水に環境をくわえたのです。豊かな自然環境は子供たちの健全な心を育みますが、最近は未成年の異常な事件が多発しています。私のように子供時代から水族館の飼育係になってからでも多くの生き物の生命を奪ってしまっただけ人間としては、その償いをするべく生物の保護や生息環境の保全に全力を注ぐべきでしょう。しかし、多くの命を奪って来たからと言ってわたしは冷酷非情な人間に育ったとは思っていません。生き物の死を見つめてその死という事を考えることは大事なことだと思います。

ハンザキは夜行性が強く、なかなか野生の姿を見ることはできません。ハンザキ研の横を流れる市川にはハンザキが多産すると言っても見えないものを護ろうという考えになるのは難しいことと思います。見て触れてよくその生態を知ることが保護保全につながる道だと思います。ですから、観光施設ではないのですが、公開見学会や夜間観察会などを実施してできるだけ多くの人たちにハンザキのことを知って頂きたいと考えつつ活動しています。おかげさまで、多くの支援会員のバックアップを受けて NPO 法人の活動を続けてきました。会員の皆様方には感謝するのみですが、周辺の方々にもお勧めしていただきたいと思っています。まずはイベントに参加してみればハンザキの魅力が感じられることと思いますので、口コミで知人をお誘いしてみてください。

平成 27 年 3 月 10 日

NPO 法人 日本ハンザキ研究所
理事長 栃本 武良

話題など

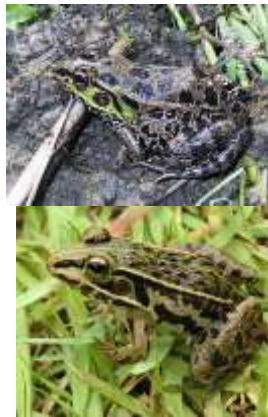
岡山市におけるナゴヤダルマガエルの保全活動 その1

おかやま大野ダルマガエル保全プロジェクト
貸谷康宏

ナゴヤダルマガエルとは？

ナゴヤダルマガエルは、レッドデータブック 2014（環境省）で絶滅危惧ⅠB類に指定されているカエルです。南西諸島を除く日本本土に生息するカエル類では、唯一の絶滅危惧種で、ランクだけを見れば、絶滅危惧Ⅱ類のオオサンショウウオよりも希少な両生類と言えます。愛知県から広島県東部および愛媛県島嶼部にかけての東海・瀬戸内海沿岸地域を中心に分布しています。瀬戸内海沿岸ではとくに減少が著しく、絶滅が心配されています。

分類上は、アカガエル科に属している種ダルマガエルの亜種になります。同属のトノサマガエルとよく似ていますが、背中斑紋が大きく丸く、後脚が短いのが区別点になります。岡山の個体群は、背中線が無いのでより見分けやすくなっています。ちなみに、同じくダルマガエルの亜種



として、関東地方に分布しているトウキョウダルマガエルがいます。亜種名に関わらず、一般には「ダルマガエル」の名で親しまれることから、ここでもダルマガエルと呼ぶことにします。

岡山のダルマガエルの生息地

岡山県内では、南部の河川に沿った平地の水田地帯を中心に分布しており、一部では中山間地域にも生息地があります。分布は局所的で、水系などで大まかに分けると、十余りの生息域が残されています。いずれも、かつて洪水が頻発したような低湿地帯であったり、ほ場整備が行われていなかったり、水田の隅

に溝（岡山では「よけ」「ひよせ」「ねき溝」などと呼ぶ）が掘られているなど、乾きにくい湿潤な環境が残されている水田です。

その中でも、岡山市の市街地中心部から最も近い位置にある「大野地域」が、今回紹介するダルマガエル個体群です。

大野地域個体群の保全に至る経緯

大野地域は二級河川の笹ヶ瀬川沿いに広がる平野部に位置し、のどかな田園環境が残されていました。しかし、JR岡山駅からわずか3km余りの好立地にあることなどから、ここ10年の間に市街地化が進みました。

大野地域にダルマガエルが生息していることが分かったのは、2001年のことです。ところが、わずか4年後の2005年に、大型スーパーの建設が決定しました。これを皮切りに、ホームセンターや家電量販店などが加わり、ダルマガエルが棲む主要な水田は、ほとんどが開発されることになってしまったのです。

この事態を受けた岡山市は、開発企業に対し、ダルマガエルを主な対象として環境保全対策を行うよう指導しました。これをきっかけとして、開発企業、コンサルタント、岡山市、学識者などが中心となり、ダルマガエルの保全活動がスタートしました。



ダルマガエルの保護の方策

ダルマガエルを保護するにあたり、岡山市や地元の学識者などと相談しながら、その方針を練りました。その結果、ダルマガエルの生息環境は水田であること、保護区などの確保は現実的に難しいことから、取れる手段は

「周辺の水田への保護移動」しかない、という考えで一致しました。しかし、ダルマガエルの大規模な保護移動の事例は、知りうる限り広島県での例が2,3あるのみでした。そこでも、移動後の生息状況はまだ安定しないという状況でした。ダルマガエルはこうしたら野外で保全できる、という知見がほとんどないまま、試行錯誤の保全活動が始まりました。

保護移動先の選定

保護移動することは難しくありませんが、問題は、移動先の水田でダルマガエルが安定して生息できる保証が全くないことでした。そのため、従来の生息地に近く環境条件が大きく異なる大野地域の中での移動を優先的に考え、次の条件がそろった場所を探しました。①湿潤な水田である、②付近に草地がある、③土地所有者と耕作管理者両方の承諾が得られる、④当面開発される見込みが低い。

その結果、従来生息地から300mほどの距離にある水田を選定し、メインの移動先としました(以下、保全水田1)。保全水田1の状況については、別の機会に詳しく紹介したいと思います。

ダルマガエル引っ越し作戦

開発される水田はとて広かったため、保護移動作業にはできるだけ多くの人手が必要でした。そこで、一般市民からボランティアを募集して大々的に行うことにしました。イベント名は、「ダルマガエル引っ越し作戦」。

引っ越し作戦は、2005年から2007年にかけて4回に分けて行いました。ありがたいこ

とに、参加人数は常時140人以上にのぼり、最も多かった回では213人もの協



力が得られました。

保護移動の結果

保護移動によって、合計で2,364個体ものダルマガエルを保護しました。カエルを捕獲した建設予定地の水田は、約6.2haに及びます(うち1.3haはダルマガエルの生息なし)。この結果から、ダルマガエルがいた4.9haの水田における生息密度は、482個体/haでした。一般的な水田の大きさである一反(約1,000m²)に換算すると、48個体です。水田1枚にすむカエル1種の個体数としては、少ないかも知れません。しかし、いかに大人数で引っ越し作戦を行ったとはいえ、広い水田で人が捕まえられるカエルの数には限界があります。生息個体の何割を捕獲できたのかは予測もつきませんが、おそらくはもっと多くのダルマガエルが生息していたと思われます。

なお、場所によって生息数は大きく異なり、最も多い1,113個体が保護された1.5haの区画では(742個体/ha)、ヨシの茂る休耕地が残されていました。こうした確認状況は、ダルマガエルを保全する上でのヒントになるかも知れません。

保護移動の際には、捕まえたダルマガエルの大きさを測りました。頭の先からお尻までの体長が、3cm以下のものをS、3~4cmをM、4cm以上をLとして3段階で記録しました。概ね、Sサイズは未成熟、Lは成熟、Mはその中間と考えられます(「改訂版日本カエル図鑑」(前田・松井)によると、ダルマガエルの成熟サイズは雄で35~62mm、雌で37~73mm)。その結果を見ると、捕獲した時期によって体長の構成は異なりました。S:M:Lの割合は、10月後半では3:5:2、翌年5月後半では1:6:3となっていました。このことから、秋季はその年に生まれた未成熟の小さな個体が多く、翌年の初夏にかけて、個体の成長が進んでいることがうかがえました。

次回は、保護移動後のダルマガエルの生息状況などについて述べたいと思います。

イラストスケッチ



その25 山椒ウオ!?



サン吉: オオサンショウウオ 川にすむ王様である



トリ子: トリ聖宇宙人 地球を征服するべくサ吉の 生命力をさくらしている

随想

私にとってのハンザキ研

会員 安原珠水

私のモットーは、なんにでも挑戦したいし、興味があることに全力で取り組みたい。ハンザキ研での活動がその一つだ。ハンザキの魅力にとりつかれたのはもちろん、ハンザキ研を通して出会った素晴らしい人達と一緒に活動をしたというのが今の気持ちとしては大きい。

まず、私はハンザキの魅力は、ギャップだと思う。大きな体で離れた目に大きな口という愛らしく、お腹や指などぶにゆぶにゆしている。普段おとなしく川底に潜んでいて、5分経っても、10分経っても全く動かない。30分経ってやっと動いたかと思ったら、すごく面倒臭そうに水面に現れ呼吸して、後退りするようにまた水中に戻る。そして何事もなかったかのようにまたしばらく全く動かない。だか、そんなハンザキが俊敏な動きをすることがある。目の前に餌がきた時だ。水中でじっとしているハンザキの目の前に餌が来たら、一瞬の間に大きな口を開けて一気にバクリと食べてしまう。そして食べ終わったらまた何事もなかったようにひっそりと水中に潜んでいる。始めて餌を食べるところを見たときはすごく驚いた。そして、そのギャップのあるハンザキに虜になってしまった。

また、ハンザキは何年生きるかも分からず謎の多いところも惹かれる。研究は少しずつ進んできているが、まだ分からないことが多い。誰でも少しでも携われれば、最先端の研究に協力できて、何かに役立つかもしれない。無限の可能性があるので。

次に、ハンザキ研には、研究を支える様々な個性的な人達がいるが、みんな1つの目標に向かって協力して活動している。栃本先生と話しているとハンザキに対する情熱をす

く感じる。始めてハンザキ研に行ったとき、何も知らない私に懇切丁寧に教えて下さり、すごく嬉しかった。栃本先生は、すごい人なのに、誰にでも分け隔てなく接していて、皆にハンザキの事を知ってもらいたい、ハンザキの研究を引き継いで続けてほしいという熱い思いがある。そして、その栃本先生の気持ちに賛同して、様々な形で先生の研究を支えている人達がいる。みんな職業も年齢も住んでいるところも様々だが、それぞれできる範囲で楽しんでやっている。ハンザキ研の活動に参加すると、ハンザキのこと以外にも、生野の自然環境や、生野の魅力を知ることができる。また、ハンザキ研で出会った人達は、ハンザキに対する情熱だけでなく、色々なことに好奇心旺盛に取り組んでいる人が多いと思う。色々な話をして、今まで知らなかった楽しい世界を知りたいと思う。

私は、ハンザキ研まで、車で片道3時間かかるので、あまり頻繁に活動に参加できないが、これからもできる範囲で研究に携わって行きたいと思う。



植物調査

春の植物

- ① 講師：前田常雄
- ② 日時 5 月 20 日 8:30～17:00
- ③ 場所：銀山湖左岸菅町谷・黒川ダム左岸側
- ④ 天候：曇り
- ⑤ 参加者：事務局 1 名
- ⑥ 経過
 - 8:30 ハンザキ研究所
 - 9:45 菅町キャンプ場
 - 12:15 ハンザキ研帰着
 - 14:00 黒川ダム左岸堰堤
 - 16:30 ハンザキ研究所

花つき草木本の採取を目的とした。県営生野ダム（1972 竣工）建設に伴い廃村となったダム湖上流の菅町谷へ入った。菅町キャンプ場から約 2km 奥迄林道伝いに採取を行った。午後は、黒川ダム堰堤から左岸側約 2.5km を対象とした。何れも採取種は極めて少ない、人工植林や動物の食害が大きく影響していると思われる。

調査地では、クロモジ、ウリハダカエデ、タムシバなど、通常、鹿などの食害を受けないとされている植物にも食跡があり食害の拡大が見られた。

野鳥調査

- ① 開催日 6 月 15 日（日）
- ② 講師 脇坂英弥夫妻
- ③ 場所 ハンザキ研周辺と黒川湖右岸
- ④ 時間 8:00～12:00
- ⑤ 参加者 11 名 事務局 5 名（講師とも）
一般 6 名（大人 4、子供 2）
- ⑥ 概要
 - 8:00 ハンザキ研下流部にカスミ網を設置（脇坂夫妻）
 - 8:20 朝ハンザキ研 窓下で拾ったキビタキのレクチャー
 - 11:00 上流部網の確認後、黒川ダム湖右岸で調査
 - 12:00 ハンザキ研で解散
 ハンザキ研の下流部に仕掛けた網で、カワセミを捕獲。昨年度確保した♀と比較して雄雌の見分け方とカワセミ、ヤマセミの足の特徴、（指が途中で一本になっていて、1 m 近い巣穴を掘る役割を果たしている）などのレクチャーを受ける。上流部の網はヤマセミを狙い、黒川日吉神社下に仕掛けるが、すぐ上流で魚釣り客が多く入川していて不発。黒川湖のラインセンスでは湖面を悠然と飛ぶミサゴをはじめ、オオルリ、キビタキ、シジュウカラ、メジロ、

キセキレイ、カケス、ヒヨドリなど多数の野鳥を確認した。

NO	確認種名	数	適用
1	トビ	3	
2	キセキレイ	3	給餌確認
3	メジロ	3	
4	ヒヨドリ	4	
5	シジュウカラ	3	
6	ウグイス	1	
7	キビタキ	1	
8	ミサゴ	1	
9	オオルリ	1	
10	カケス	1	
11	ヤマガラ	1	
12	ツバメ	1	
13	コゲラ	1	
計		13	

キノコ定点調査

- ① 講師 横山了爾・宇那木隆
- ② 期間 5 月 6 日～9 月 18 日 6 回
- ③ 時間 9:30～17:00
- ④ 場所 1～6 定点
- ⑤ 参加者 28 名（延べ）
- ⑥ 概要
 - 5 月 6 日 キノコの発生はほぼない。No.1 にヒグラシの冬虫夏草が枠内に 2 本と枠外 1 本のみであった。
 - 6 月 10 日 全体でクヌギタケが数本のみである。各地点にはギンリョウソウが多くみられた。
 - 7 月 2 日 全体的に湿度も少なく乾燥気味でキノコの発生は少ない。その中で No.6 地点にオオミノアカヌマベニタケが 90 本とオチバタケが大量に発生している。ホウキタケの仲間で薄青色の珍しいキノコを採取した。
 - 7 月 29 日、全体にキノコの発生条件は整っている。量も多い。テングタケ、イグチ、ベニタケ科などの菌根種が多くみられた。
 - 8 月 7 日 全体にキノコの発生条件は整っている。量も多い。ベニタ、イッポンシメジフウセンタケ科などの菌根種が多くみられた。
 - 9 月 18 日 全体的に湿度が少なく乾燥気味である。ゲリラ豪雨の影響か腐葉土が通常の半分以下に減少している。キノコの発生量も少ない。

事務局 奥藤 修

編集後記

あんこうの発行遅れは、ページ数を減らすだけで片付く問題ではありません。ここには今の日本ハンザキ研究所が抱える構造的な問題が集約されています。あんこうの発行のみだけでなく、イベントや各種事業の対応など、限られた人員で行っているのが実状です。理事、事務局員は全て兼業で、専従(従業員)を雇用していないため、どうしても出来ることが限られてしまいます。これまでは個人の頑張りにより何とか出来ていたことも、NPO 法人化後 6 年半が経過し、それぞれを取り巻く環境にも変化が出て、思うような活動が出来ない事態も生じてきました。少しずつスタッフの充実は図られていますが、いかんせん 20~50 代の若いスタッフ、それも実務を担当出来る人が極めて少ないというのが最大の問題点です。ただ、これはちょうど一般社会における労働力の中核を担う層であり、稼いでゆかなければならないのは当然ですから、NPO 活動は二の次ということにならざるを得ないでしょう。日本ハンザキ研究所も経済的に十分な力があれば人を雇うことが出来るので、どうか皆様にも一層のご支援、ご協力を賜りたいと思いますが、情報発信だけでなく、さまざまな活動が充実しているところに人は魅力を感じるのは当然のことなので、何とか踏ん張らなければならないと思います。鶏が先か卵が先か、まずは援助をお願いしますと言いたいところですが、流れは上から下が基本。どちらが先にやらなければならないかは見えています。

臨時編集長 黒田 哲郎



平成 27 年 3 月 31 日 発行

特定非営利活動法人
日本ハンザキ研究所

〒679-3341

兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL・FAX 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

H P: http://www.hanzaki.net

